元気いっぱい！ちばファミリーコンサートin南総

プログラム・ノート

文=小村 公次

1 グリーグ：「ペール・ギュント」より“朝”

ノルウェーの作家イプセンが書いた『ペール・ギュント』という劇は、主人公のペールが各地を旅行したあと、年老いて故郷に帰ってくるまでの物語です。この劇の音楽を作曲したのはノルウェーを代表する作曲家グリーグ（1843～1907）で、そのなかで一番有名な曲が今日演奏される「朝」です。

この曲は主人公のペールがアフリカのモロッコで迎える朝のすがすがしい気分をあらわしたもので、フルートが演奏する美しい旋律で始まります。

2 J.S.バッハ：管弦楽組曲第3番より“アリア”

ドイツの作曲家ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685～1750）は、教会音楽だけでなく宮廷行事のための音楽もたくさん作曲しました。

この管弦楽組曲も宮廷行事のために作曲したもので、堂々とした序曲ではじまり、踊りの音楽の形式を使った曲を組み合わせて作られています。今日演奏される“アリア”は組曲第3番の第2曲で、ゆったりとしたテンポで演奏され、うっとりするような響きにあふれています。

この旋律は19世紀後半にヴァイオリン独奏曲に編曲され、「G線上のアリア」と呼ばれるようになりました。

3 ベートーヴェン：ロマンス第2番ヘ長調 作品50

今年はベートーヴェン（1770～1827）の生誕250年にあたります。ドイツのボンで生まれたベートーヴェンは、22歳からオーストリアのウィーンで活躍するようになります。

今日演奏される「ロマンス」第2番は、友人のヴァイオリニストからヴァイオリンの弾き方などを教えてもらったことがきっかけで作曲したと考えられています。

曲は独奏ヴァイオリンの甘く美しい旋律がくり返し演奏され、その途中に情熱的な短調の響きの音楽があらわれます。こうした性格の異なる音楽が競い合うように演奏され、味わい深い響きで結ばれています。

4 ブラームス：ハンガリー舞曲第5番ト短調

ドイツの作曲家ブラームス（1833～1897）は、ハンガリーのヴァイオリニスト、エドゥアルト・レメーニの伴奏ピアニストとしてドイツ各地を演奏旅行したとき、彼が弾くロマ（ジプシー）の音楽を聴いてすっかり気に入りました。このときの経験から生まれたのが「ハンガリー舞曲集」です。もともとは21曲からなるピアノ連弾曲でしたが、この曲の楽譜が出版されると大人気になったため、オーケストラ曲に編曲して演奏されるようになりました。

なかでも今日演奏される第5番は情熱的な短調の旋律が有名で、広く演奏されています。この旋律は途中でテンポが急に遅くなったり速くなったりするところがあり、リズミカルな中間部をはさんで元の旋律があらわれ、最後は力強く曲をとじます。

5 ドヴォルザーク：スラブ舞曲第3番作品46-3

ブラームスはハンガリー舞曲集が大成功したので、チェコの作曲家ドヴォルザーク（1841～1904）にも同じような舞曲集を作曲するようにすすめました。そこでドヴォルザークはスラブ民族に伝わる舞曲を使ってピアノ連弾用の「スラブ舞曲集」を2つ作曲しました。

この舞曲集が出版されると大評判になったので、ドヴォルザークは自分の手でオーケストラ曲に編曲しました。こうしてこの舞曲集は世界各地のオーケストラで演奏されるようになりました。

今日演奏される第3番はポルカ風の明るい旋律が何度もあらわれ、その途中に新しい旋律が2つあらわれるという形式で作曲されています。この2つの旋律をはさみながら、のどかなポルカ風の旋律が繰り返し演奏され、最後は力強い響きで曲を閉じます。

6 八木澤教司：「インスパイア！」～夢見る子供の旅

八木澤教司は1975年生まれの作曲家で、吹奏楽曲や合唱曲、校歌などを数多く作曲しています。今日演奏される「インスパイア！」は、シンガポールのイーシュン小学校のコンサートバンドから依頼されて2017年に作曲された曲です。

曲名はこの小学校が校訓として掲げている独立、愛国、誠実、忍耐、高潔、尊敬、卓越という7つの言葉の英語の頭文字からINSPIRE!（インスパイア！）と名付けられました。

サブタイトルが“夢見る子供の旅”とあるように、困難や苦難を乗り越え、希望ある未来へ向かう若い世代を応援する音楽になっています。

7 ビゼー：歌劇「カルメン」より“前奏曲”

フランスの作曲家ビゼー（1838～1875）が作曲したオペラ「カルメン」は、自由で意志の強いカルメンという女性が主人公です。タバコ工場で働いていたカルメンは、昼休みに騒ぎを起こしてつかまりますが、護送するドン・ホセに色目を使って逃げます。ホセはカルメンのことが忘れられなくなり、彼女を追いかけますが、カルメンはイケメンの闘牛士エスカミーリョのことが好きになっていました。嫉妬したホセは、オペラの最後でカルメンを待ち伏せして刺し殺し、後悔するなかオペラは幕となります。

今日演奏される前奏曲は、情熱的な響きにあふれた音楽で、悲劇的な最後を暗示するように曲を閉じます。オペラの開幕にぴったりの曲で、しばしば単独で演奏される名曲です。

8 チャイコフスキー：バレエ音楽「くるみ割り人形」より“花のワルツ”

ロシアの作曲家チャイコフスキー（1840～1893）が作曲したバレエ音楽「くるり割り人形」は、クリスマス・イブの出来事を描いたものです。

少女クララは小人の国でネズミの軍隊に襲われたくるみ割り人形を助けます。すると人形は呪いがとけて元の王子の姿に戻り、クララを「雪の国」と「お菓子の国」へ案内します。

この“花のワルツ”は、「お菓子の国」でコンペイ糖の精たちがクララを歓迎して踊る場面の音楽です。ハープの独奏ではじまり、ホルンがワルツの旋律を華やかに演奏し、中間部では愁いにみちた旋律があらわれます。やがて最初の旋律があらわれ、華やかな響きを増すなか曲を閉じます。

9 フチーク：行進曲「剣士の入場」作品68

チェコの作曲家ユリウス・フチーク（1872～1916）は軍楽隊の指揮者として活躍し、300曲以上もの行進曲やポルカなどを作曲しました。

なかでも有名なのが1897年に作曲したこの行進曲です。これは古代ローマ時代に剣闘士たちが競技場に入場する場面をイメージしたものです。

古代ローマ時代の剣闘士たちが闘う闘技会は見世物として人気がありましたが、残酷だとの批判が高まり、皇帝の命令で禁止されました。

この行進曲は勇壮な音楽で始まり、半音階の旋律による2つの行進曲が中間部をはさんで演奏され、最後は堂々たる響きで曲を閉じます。

10 古関裕而：オリンピック・マーチ

古関裕而(1909～1989)は1930(昭和5)年にコロンビア・レコードの専属作曲家になり、戦前は歌謡曲や軍歌をたくさん作曲しました。戦後は「長崎の鐘」やラジオ・映画の主題歌などを作曲しましたが、なかでも有名なのが今日演奏される「オリンピック・マーチ」です。

1964年10月10日の東京オリンピック開会式で演奏されたこの曲は、スポーツ関係の応援歌をたくさん作曲した古関裕而ならでは響きにあふれています。今年は古関裕而と妻の金子をモデルにしたNHK連続テレビ小説「エール」が放送されました。